忙中一筆

全国に発信していきたい一つの大事なまちづくり

髙橋正夫

出張の列車での移動中、ふと車窓に目を移し、息をつく。少し妙な、そして照れくさい自分に気付く。そう、手元にある小説の中の「主人公」になりきり、その世界に没頭している自分に気付かされるからだ。小説の主人公たちや、登場する脇役達、彼らの動静や感情の表現、自分の勝手な演出も加わりまるで映画を見ているような感じ、自分があたかもその現場にいるような感覚に気付く。別に他人に聞こえる訳でなく、何も遠慮しなくて良いのだが、照れくさくも感じる瞬間でもある。

我が町、本別町は、現在、第五次総合計画の仕上げ段階となっており、二〇一一（平成二三）年から開始となる第六次総合計画の策定作業も進めているところである。現在の総合計画の中で、主要プロジェクトに位置づけているのが三本の「ほんべつ夢プラン」であり、その一つ、「福祉のまちづくりプラン」では、「太陽の丘」に設置した保健・福祉・医療施設群を拠点に、町民の皆さまとの協働で新たな試みに次々挑戦し、二〇〇六年二月には「福祉でまちづくり」の宣言に至り、同年八月には町村では初めてとなる「全国介護保険サミット」を開催したところである。二つめの「環境に調和したまちづくりプラン」では、一七品目にわたるゴミ分別により、二〇〇七年度一般廃棄物リサイクル率が全道一になる実績を残すことができた。最後になるが、三つめの主要プロジェクトが、「本のまちプラン」の推進である。

私は、これら三つの主要プロジェクトの推進に当たっては、「まちづくりは、ひとづくり」であり、生涯学習を通じた協働の力をもって進める理念であった。ところで、「本のまちプラン」策定に至った経過は、当時の総合計画策定審議会の席上、ある委員の方が、子供たちと「本」の関わりが大切であること、また、老若男女を問わず読書の重要性を力説され、特に町名である「本別」とは「本と別れる」ではなく、逆に「本とは切っても切れない縁を大切にするまちづくりを展開しては」との発想から生まれたプロジェクトであった。

誰でもが子供の頃に影響や感銘を受けた映画と同じく、今でも思い出が蘇る「物語」や「小説」の一つや二つがあると思われる。「本」が持つ魅力や

その力となる効果について、専門家ではないので省かせていただくが、読書の持つ魅力は、言葉を学び感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きていく力を身につけてくれるものだと考えている。また、大げさに言えば、これまでの先人たちの人生の経験や、歴史等の専門書に見られるように、現在を生きる私たちの足もとを照らし、そしてこれから未来へと進むべき道筋を教えるための誘導灯となり、かけがえのないものとなっている。

ところで、「本のまちプラン」の現状はどうか、と言うと、特徴的なところを挙げれば、まずは大きな可能性を秘め吸収力を持つ児童、そしてその保護者を対象に、数多くの「本」に触れ合ってもらうため、二〇〇一年に図書館の改修から着手し、環境が整ったところで、二〇〇五年から「子どもの本・本の町・夢づくりフェスティバル」を開催し、世界の絵本や童話の展示のほか、ボランティアによる読み聞かせ、児童文学者を招いての講演などを通じ、「本」に触れてもらう機会を増やす取り組みを始めたところである。また、児童のみならず、小学校や地域の児童館、そして高齢者向けにも「本」に触れてもらう機会を発信し、これまでの「利用者待ち」の姿勢から一転して、積極的な売り込み攻勢により「本」をアピールしているのである。そして内部向けとして、職員に読んでもらいたい話題性のあるものやタイムリーな「本」を図書館司書にピックアップしてもらい、これを庁内会議の資料に添付してPRすることも忘れてはいない。読んでもらえたかどうか、そこまでは押し売りはしていないが…。

絵本や童話などの乳幼児への読み聞かせについても、「本」が持つ多くの効果のうち、考える力を養うと言われているが、その効果は成人になってから発揮されるとも。

二〇〇五年から開始した「本」にかかわるイベント、仮に当時三歳であった子が今年で七歳、成人するまでにあと一三年、二〇二二（平成三四）年になって、その子がどのように社会と関わりを持ち、また、どのように考えて行動しているのか、何とも長い期間を要する「ひとづくり」でもある。

「本のまちプラン」は、言い換えれば「考えること」を育むプランであり、すなわち、「考える人が多く住むまちのプラン」に変革を遂げて頂きたい、と期待をしているし、そのことが巡りめぐって生涯学習による「まちづくり」に輪廻して繋がっていくことが将来の夢であり、その夢づくりを今進めているところである。

最初の「本」の話しに戻ろう。小説に登場する人物のいきいきとした話しぶりや行動が目に浮かぶだけでなく、その物語にある架空の町の空気やにおい、たたずまい、読んでいる者に対して与える緊張感や高揚感、本当に「本」の持つ力は素晴らしい。

〈たかはし　まさお・本別町長〉